平成 30 年度勝央美術文学館特別展■第 16 回あかやま県民文化祭参加事業

文豪からの手紙

2018.11.17［sat］→ 12.2［sun］

開館時間：午前 10 時～午後 6 時（入館は閉館の 30 分前まで）　休館日：月曜日

『改造社『日本現代文学全集』宣伝のための講演旅行の際，新潟高校にて』／画像提供：日本近代文学館

勝央美術文学館
SHOO MUSEUM OF THE ARTS
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田 207-4

beyond 2020

関連イベント情報

関連イベントは、参加無料ですが、当日の入館券が必要です。
ワークショップ・講演会は未就学の方の参加はご遠慮ください。

朗読会

『蜘蛛の糸』（原作：芥川龍之介）

講 師▶紙芝居おじさん
日 時▶11 月 17 日（土）
　　午前 10 時 30 分（開会式後）～
会 場▶勝央美術文学館 町民ギャラリー 1
定 員▶20 名程度（予約不要）

文学ワークショップ

『文学を読むってこういうこと！』

講 師▶赤木かん子 氏（児童文学評論家）
日 時▶11 月 17 日（土）午後 2 時～
会 場▶勝央美術文学館 町民ギャラリー 2
定 員▶先着 20 名【要申込・電話申込可】
締 切▶2018 年 10 月 28 日（日）

記念講演会

『芥川龍之介の田端生活
　～周辺の人びとが見たその素顔～』

講 師▶木口直子 氏（田端文士村記念館学芸員）

『芥川龍之介を中心として』

講 師▶北村　薫 氏（小説家）
日 時▶11 月 23 日（金 / 祝）午後 2 時～
会 場▶勝央美術文学館 町民ギャラリー 1
定 員▶50 名【要申込・応募多数の場合抽選】
締 切▶2018 年 11 月 4 日（日）必着

▼講演会申込方法

往復はがきの往信裏面にイベント名称・住所・氏名・年齢・電話番号・講師への質問を、返信表面に住所氏名を明記し、下記宛先までお申込みください。
＊応募はお一人様一通。

宛先：〒709-4316
　　岡山県勝田郡勝央町勝間田 207-4
　　勝央美術文学館　宛

展覧会情報

【観覧料】

一般：500 円（団体 400 円）／高校生以下無料

※団体：同じ区分 10 名以上
※割引：割引の併用はできません
　　必要な割引券・カード、証明書を必ずご呈示ください
※障がい者手帳をお持ちの方はご本人と同伴者 1 名が免除
※中学生以下要保護者同伴

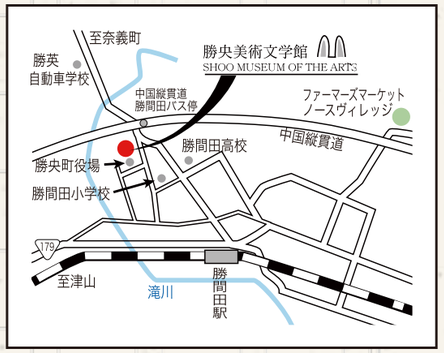
主催：勝央町、勝央町教育委員会

共催：公益財団法人美作学術文化振興財団
協力：日本近代文学館、田端文士村記念館
　　郡山市こおりやま文学の森資料館、紙芝居おじさん
後援：勝央町文化協会、NHK 岡山放送局、RSK 山陽放送、
　　OHK 岡山放送、TSC テレビせとうち、RNC 西日本放送、
　　KSB 瀬戸内海放送、テレビ津山、山陽新聞社、津山朝日新聞社、
　　FM 岡山、エフエムつやま

アクセス

勝央美術文学館
SHOO MUSEUM OF THE ARTS
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田 207-4
TEL.0868-38-0270 ／ FAX.0868-38-0260

開館時間外、特別展示替え期間中は、電話・受付対応ができない場合があります。



■鉄　道：JR 岡山駅（津山線）→津山駅（姫新線）→勝間田駅下車徒歩 15 分
■バ　ス：中国ハイウェイバス
　　JR 津山駅より 15 分／新大阪駅より 2 時間 15 分
　　《中国勝間田》下車徒歩 5 分
■自動車：中国自動車道
　　津山 IC より約 15 分／美作 IC より約 10 分／勝央 IC より約 5 分
■飛行機：岡山空港から車で約 1 時間 10 分

公式サイト・SNS にて情報発信中！
公式サイト｜http://museum.town.shoo.lg.jp　@shoomuseum_PR　Facebook

芥川龍之介と木村毅の交流

小生の影と言う小説を評して味噌の味噌臭きはなぞ々悪口を言はれたる事あり爰時は憤りを発せしか

芥川氏の如きは、生臭芸術家と云ふべきであらう。

芥川龍之介
《木村毅宛書簡》
1925（大正14）年8月20日

この書簡は、木村毅が、大正14年7月に自身の処女作『兎と妓生と』を芥川龍之介へ献本した事に対する返礼として送られた、二人の交流のきっかけとなった書簡です。

芥川は、大正9年に改造社発行の雑誌『改造』にて発表された自身の作「影」を、当時月評を書いていた木村に酷評されていたため、この時の献本に大変驚いたそうです。

この書簡には、後に、木村が書簡を受け取った際の思いなどを記した直筆メモが添えてあります。

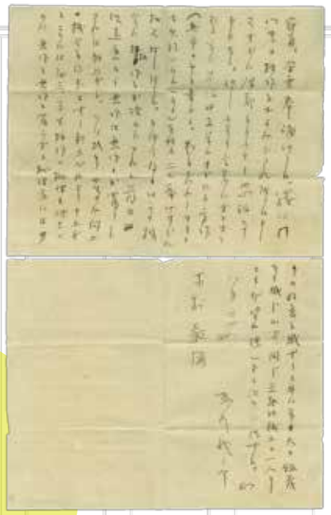
画像提供：日本近代文学館

芥川龍之介《影》
『改造 第2巻第9号』1920（大正9）年9月
改造社発行／日本近代文学館蔵

映画的技法を取り入れた本作は、横浜で働く中国人の商人が、妻の不貞を疑う事から始まる物語。

木村毅《兎と妓生と》
1925（大正14）年7月14日
新詩壇社発行

大正12年から大阪毎日新聞に掲載された木村毅の処女作。本作は韓国併合の頃の義兵闘争に関わる作品。



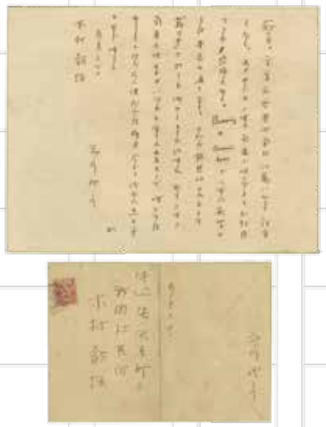
芥川龍之介
《木村毅宛書簡》
1925（大正14）年8月28日

交流により、甘い評価をつけることなく、今後も変わらず批評してほしいという内容。

君に前に座られると、なんだか山が突っ立っているような威圧を感ずる

松蔭女子大学研究紀要第七号松蔭女子学院大学設置記念昭和41年2月8日発行／木村毅『芥川龍之介の思い出』

なほ今後も何かの機会に拙作をお読み下され候節は、ご遠慮なく悪作は悪作とお罵り下され度願上げ候。



芥川龍之介
《木村毅宛書簡》
1926（大正15）年5月30日

木村毅著『文藝東西南北』で芥川龍之介著「報恩記」「籔の中」がブロウニングに影響を受けているのでは無いかと指摘した木村への返信。

画像提供：日本近代文学館

芥川龍之介（あくたがわ・りゅうのすけ）
明治25年3月1日、東京生まれ。父新原敏三、母フクの長男。後に伯父・芥川道章の養子となり、芥川姓を名乗る。

東京帝国大学英文科卒。在学中から創作を始め、短編「鼻」が夏目漱石の激賞を受ける。その後王朝もの「羅生門」「芋粥」、中国の説話によった童話「杜子春」などを次々と発表、大正文壇の寵児となる。西欧の短編小説の手法・様式を完全に身に付け、東西の文献資料に材を仰ぎながら、自身の主題を見事に小説化した傑作を多数発表。「唯ぼんやりした不安」の中、昭和2年7月24日、薬物自殺。「歯車」「或阿呆の一生」などの遺稿が遺された。

木村毅（きむら・き）
明治27年2月12日、現在の勝央町岡に生まれる。幼少期から『少年世界』『文章世界』へ投書した。

早稲田大学英文科卒業後、出版社の編集部で評論・翻訳に携わる。大正12年、処女小説『兎と妓生と』が大阪毎日新聞で連載。大正14年『小説研究十六講』を出版。菊池寛に絶賛され、松本清張に影響を与えた。明治文化研究をはじめ、様々な分野に関する著書を発表。大衆文学に実話文学という新しい領域を開拓。第26回菊池寛賞を受賞。昭和52年、勝央町公民館前庭に木村文学碑を建立。昭和54年9月18日逝去。